

茨城県教育財団文化財調査報告第273集

馬場坪遺跡

一般県道紅葉石岡線道路改良事業地内
埋蔵文化財調査報告書 2

平成 19 年 3 月

茨城県水戸土木事務所
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第273集

馬場坪遺跡

一般県道紅葉石岡線道路改良事業地内
埋蔵文化財調査報告書 2

平成 19 年 3 月

茨城県水戸土木事務所
財団法人 茨城県教育財団

序

茨城県では、市町村や県の枠を越える広域的な交流と連携を進めるため、また、県土の均衡ある発展を支える基盤として、一般国道や主要地方道などの幹線道路網の整備を進めております。

このたび、茨城県水戸土木事務所は、小美玉市（旧東茨城郡小川町）上吉影地区において、一般県道紅葉石岡線道路改良事業を計画いたしました。その事業予定地内には馬場坪遺跡が所在します。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県水戸土木事務所から埋蔵文化財の発掘調査事業について委託を受け、平成17年5月に馬場坪遺跡の発掘調査を実施しました。

本書は、馬場坪遺跡の調査成果を収録したものであります。本書が学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、ひいては教育・文化の向上の一助として御活用いただければ幸いです。

なお、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である茨城県水戸土木事務所から多大な御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げます。

また、茨城県教育委員会、小美玉市教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対し、感謝申し上げます。

平成19年3月

財団法人 茨城県教育財団
理事長 人 見 實 徳

例 言

- 1 本書は、茨城県水戸土木事務所の委託により、財団法人茨城県教育財団が平成17年度に発掘調査を実施した、茨城県小美玉市（旧東茨城郡小川町）上吉影字馬場坪139番地ほかに所在する馬場坪遺跡^{ほぼつほ}の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査期間及び整理期間は、以下のとおりである。
調 査 平成17年5月1日～平成17年5月31日
整 理 平成18年7月1日～平成18年7月31日
- 3 発掘調査は、調査課長川井正一のもと、以下の者が担当した。
首席調査員兼班長 檜村 宣行
主任調査員 大塚 雅昭
主任調査員 市村 俊英
- 4 整理及び本書の執筆・編集は、整理第一課長瓦吹堅のもと、主任調査員市村俊英が担当した。

凡 例

1 地区設定は、日本平面直角座標第Ⅸ系座標に準拠し、X軸=+24,400m、Y軸=+51,840mの交点を基準点(A 1 a1)とした。この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々40m四方の大調査区に分割し、さらにこの大調査区を東西・南北に各々10等分し、4 m四方の小調査区を設定した。大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA, B, C…、西から東へ1, 2, 3…とし、「A 1区」、「B 2区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へa, b, c…j、西から東へ1, 2, 3…0とし、名称は、大調査区の名称を冠して「A 1 a1区」、「B 2 b2区」のように呼称した。

2 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構	SD－堀跡・溝跡	SK－土坑	
遺物	TP－拓本記録土器	Q－石製品	M－鉄製品
土層	K－攪乱		

3 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。

4 遺構及び遺物実測図の掲載方法については次のとおりである。

(1) 遺構全体図は300分の1、各遺構の実測図は30・60分の1の縮尺で掲載することを基本とした。

(2) 遺物は原則として3分の1の縮尺で掲載した。

(3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。

 施釉部

● 土器

5 遺物観察表・遺構一覧表の表記については次のとおりである。

(1) 現存値は()で、推定値は[]を付して示した。計測値の単位はm, cm, gで示した。

(2) 遺物観察表の備考欄は、残存率、写真図版番号等、その他必要と思われる事項を記した。

6 「主軸」は、長軸(径)を通る軸線を主軸と見なした。「主軸・長軸(径)方向」は、主軸・長軸(径)が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した(例N-10°-E)。なお、推定値は[]を付して示した。

抄 録

ふりがな	ばばつぼいせき							
書名	馬場坪遺跡							
副書名	一般県道紅葉石岡線道路改良事業地内埋蔵文化財調査報告書							
巻次	2							
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告							
シリーズ番号	第273集							
著者名	市村 俊英							
編集機関	財団法人 茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587							
発行年月日	2007(平成19)年3月23日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
馬場坪遺跡	茨城県小美玉市(旧	08236	36度	140度	15	20050501	764m ²	一般県道紅葉 石岡線道路改 良事業に伴う 事前調査
	東茨城郡小川町)上	—	13分	24分	~	~		
	吉影字馬場坪139番 地ほか	303116	05秒	37秒	16m	20050531		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
馬場坪遺跡	城館跡	中世	堀跡 1条		土師質土器(小皿・内耳鍋) 石器(砥石), 鉄器(釘カ), 獣骨(馬歯)			
	その他	不明	溝跡 1条 土坑 2基		縄文土器片, 土師器片, 陶 器片			
要約	当遺跡は、立開城の出城や在地領主の居館跡、または貴船神社の神域などと推測できる。今回の調査では、L字状に延びる薬研堀が確認された。堀の形状や出土遺物から中世の遺構であると考えられるが、限られた範囲の調査であり、出土遺物も極端に少ないことから、正確な時代を特定することはできなかった。							

目 次

序	
例 言	
凡 例	
抄 録	
目 次	
第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第3章 調査の成果	5
第1節 遺跡の概要	5
第2節 基本層序	5
第3節 遺構と遺物	5
1 中世の遺構と遺物	5
(1) 堀跡	7
2 その他の遺構と遺物	8
(1) 溝跡	8
(2) 土坑	9
(3) 遺構外出土遺物	10
第4節 まとめ	11
写真図版	

第 1 章 調査経緯

第 1 節 調査に至る経緯

茨城県水戸土木事務所は、小美玉市（旧東茨城郡小川町）上吉影地区において、百里飛行場の民間共有化に伴うアクセス道路として、一般県道紅葉石岡線の道路改良事業を進めている。

平成14年6月24日、茨城県水戸土木事務所長は茨城県教育委員会教育長に対して、一般県道紅葉石岡線道路改良事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて照会した。

これを受けて茨城県教育委員会は、平成14年10月7日に現地踏査を、平成16年12月7～8日及び平成17年1月12日に試掘調査を実施し、馬場坪遺跡の所在を確認した。平成17年1月14日、茨城県教育委員会教育長は茨城県水戸土木事務所長あてに、事業地内に馬場坪遺跡が存在する旨、回答した。

平成17年1月20日、茨城県水戸土木事務所長は茨城県教育委員会教育長に対して、文化財保護法第57条の3第1項（現94条）の規定に基づき、土木工事等のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。茨城県教育委員会教育長は、計画変更が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると判断し、平成17年2月10日、茨城県水戸土木事務所長に対して、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成17年3月1日、茨城県水戸土木事務所長は茨城県教育委員会教育長に対して、一般県道紅葉石岡線道路改良事業地内に係る埋蔵文化財発掘調査の実施について協議した。平成17年3月8日、茨城県教育委員会教育長は茨城県水戸土木事務所長に対して、馬場坪遺跡についての発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて埋蔵文化財の調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県水戸土木事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成17年5月1日から平成17年5月31日まで馬場坪遺跡の発掘調査をすることとなった。

第 2 節 調査経過

馬場坪遺跡の調査は、平成17年5月1日から平成17年5月31日まで実施した。以下、調査の経過については概要を表で記載する。

工 程	期 間
	5月
調査準備 表土除去 遺構確認	
遺構調査	
遺物洗浄 注記作業 写真整理	
補足調査 撤 収	

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

馬場坪遺跡は、茨城県小美玉市（旧東茨城郡小川町）上吉影字馬場坪139番地ほかに所在し、巴川右岸の標高15mほどの低位の台地上に位置している。

小川町の地勢は、2つの洪積台地と4つの河川流域の沖積地から構成されている。台地は、町域西部の標高20～25mの出島・石岡台地と、東部の標高30～35mの行方台地に二分されている。これらの台地は、北浦に流入する巴川と、霞ヶ浦に流入する園部川、鎌田川、梶無川の4つの河川及びその支流によって開析されており、谷津や低地が入り組んだ複雑な地形となっている。特に、町域の東部を北北西から南南東に流れる巴川流域は、浸食や堆積によって形成された河岸段丘が特筆される¹⁾。

遺跡の位置する行方台地を形成している地層は、下位から砂鉄とやや粗粒の石英を含む第四紀洪積世の石崎層、細粒砂の目立つ笠神層、粘土・砂からなる見和層、青灰色の茨城粘土層、関東ローム層となっている²⁾。

行方台地の北東部に位置する当遺跡は、巴川沿いに発達した沖積地につながる低位台地の縁辺部に立地している。この低位な台地の南北には谷津が入り込み、他の台地とは分断された様相を示している。これらの低地は水田、台地上は畑地としてそれぞれ土地利用されている。

第2節 歴史的環境

当遺跡の所在する巴川とその支流には多くの遺跡が点在し、古くから人々の生活が営まれてきたことをうかがい知ることができる。ここでは、周辺の主な遺跡について概観する。

縄文時代の遺跡は、ほとんどが標高30m前後の台地上に立地している。世楽前山遺跡〈2〉からは、早期から中期、沖ノ向遺跡〈3〉からは前期、内新田遺跡〈4〉からは後期の土器がそれぞれ確認されている³⁾。

弥生時代の遺跡は、巴川支流の台地縁辺部で確認されている。前野遺跡〈5〉、猿内遺跡〈6〉、佐才御館間遺跡〈7〉、原山遺跡〈8〉などで、主に後期の土器が採集される⁴⁾。また、巴川左岸の銚田市域においても、大乗遺跡〈9〉などから同時期の土器が確認されている⁵⁾。

古墳時代になると、当遺跡周辺に位置する羽抜沢遺跡〈10〉では、土師器が出土している。円筒型埴輪や朝顔型埴輪が出土した地蔵塚古墳は、この地に有力者が存在していたことを示しており、前述した各遺跡は、基盤となる集落の存在を推測させるものである⁶⁾。

奈良・平安時代の遺跡としては、中坪遺跡〈11〉、仲佐才遺跡〈12〉、堀之内遺跡〈13〉、芝崎遺跡〈14〉、すすき山遺跡〈15〉などが確認されている。このうち、すすき山遺跡では内面を黒色処理した土師器が採集され、また、巴川を挟んで対岸の堂越遺跡〈16〉からは、墨書土器を伴った平安時代の住居跡が検出されている⁷⁾。

当遺跡付近は古代茨城郡の白河（白川）郷に属し、白河（白川）郷は、『遊万名所略』⁸⁾によると白河という川にその名を由来し、白河は現在の巴川を示しているものと考えられている。また、『新編常陸国誌』⁹⁾では、白河（白川）郷の中に「上吉影」が含まれていたとしている。

中世以降の遺跡では、前ノ内遺跡〈17〉、館小路遺跡〈18〉、御厩前遺跡〈19〉、立開城跡〈20〉などが知られている。立開城は、当遺跡付近を勢力基盤とし、貴船神社の氏子でもある井坂（伊坂）修理が居住した城館と

伝えられている。井坂氏は当初、この土地を支配した江戸氏や園部氏の配下として台頭し、その後芹沢氏の配下となって戦国期を生き抜き、ついには佐竹氏によって滅ぼされている¹⁰⁾。この井坂氏の居住した城は、規模こそ小さいが自然丘陵を利用した要害の地であり、現在も土塁などにその痕跡をとどめている。また、貴船神社の南200mに位置していることから、氏子である井坂氏との関連も推測されており、遺跡中央部から確認された大溝は、井坂氏と密接な関係のある立開城の施設の一部であった可能性を指摘できる。さらに巴川を挟んだ対岸には紅葉城跡^{もみじじょうあと}(21)が位置し、こうした城館跡の存在そのものが河川流域を拠点とする中小の在地領主層の互いに勢力を拮抗させていた様子を示唆しているといえる。

※文中の〈 〉内の番号は、第1図及び周辺遺跡一覧表の該当番号と同じである。

註

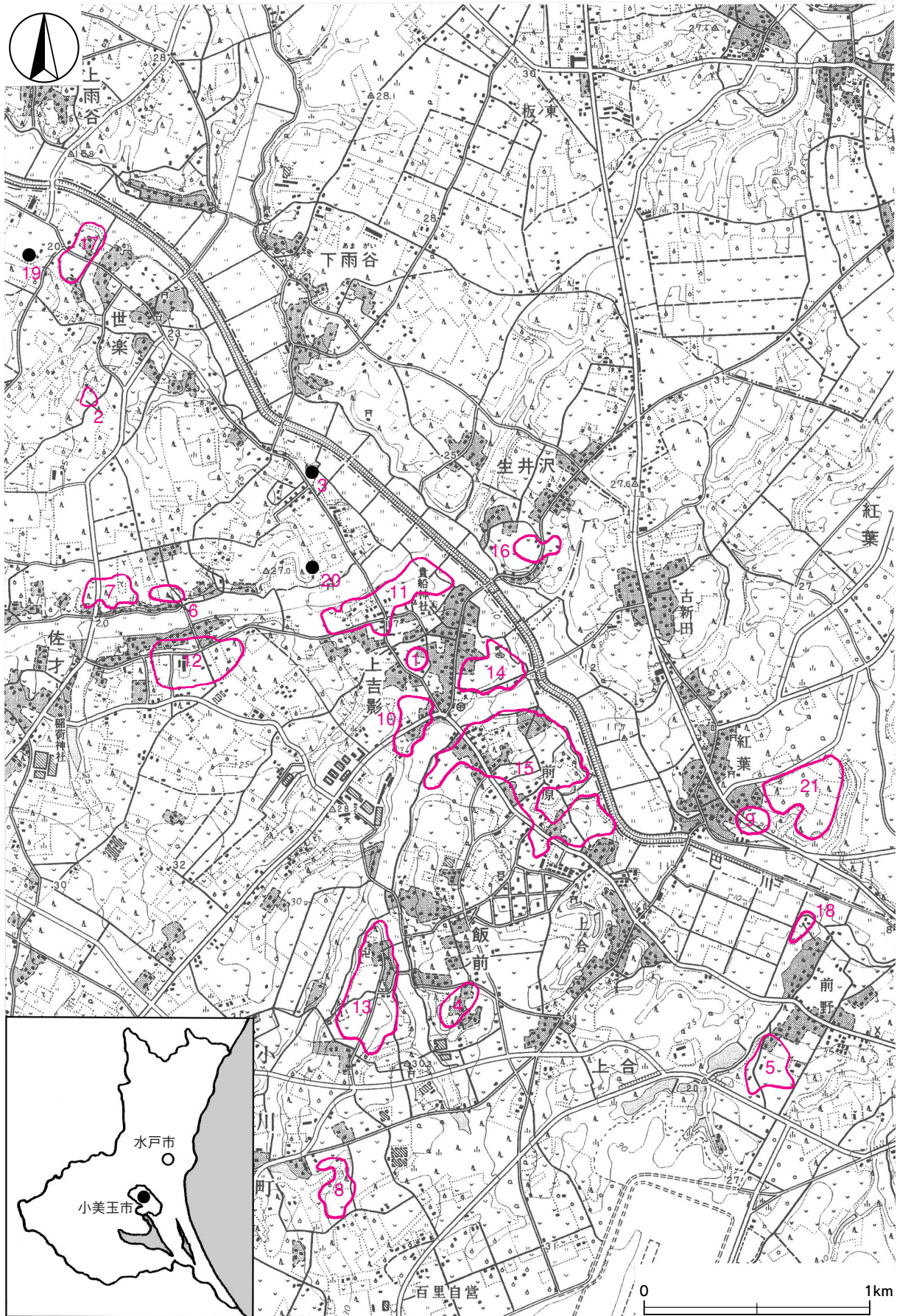
- 1) 小川町史編さん委員会『小川町史 下巻』小川町 1988年3月
- 2) 註1)に同じ
- 3) 小川町教育委員会『茨城県東茨城郡小川町 埋蔵文化財分布調査報告書』小川町 1985年3月
- 4) 註3)に同じ
- 5) 鉾田町史編さん委員会『鉾田町史 原始・古代資料編』鉾田町 1995年3月
- 6) 宮内良隆・石田幹治『地蔵塚古墳』小川町教育委員会 1981年3月
- 7) 小松崎和治「堂越遺跡 一般県道紅葉石岡線道路改良事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第245集 2005年3月
- 8) 9)には、「遊万名所略に古代茨城郡に白川(白河)という川があった」とある。
- 9) 中山信名『新編常陸国誌』崙書房 宮崎報恩会版 1979年12月
- 10) 小川町史編さん委員会『小川町史 上巻』小川町 1988年3月

参考文献

・茨城県教育庁文化課編『茨城県遺跡地図』茨城県教育委員会 平成13年3月

表1 馬場坪遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代						番号	遺跡名	時代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中世			近世	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中世
①	馬場坪遺跡						○	12	仲佐才遺跡		○			○		○
2	世楽前山遺跡		○					13	堀之内遺跡		○			○	○	
3	沖ノ向遺跡		○		○			14	芝崎遺跡		○			○		○
4	内新田遺跡		○					15	すすき山遺跡		○		○	○	○	
5	前野遺跡		○	○				16	堂越遺跡		○		○	○		
6	猿内遺跡		○	○				17	前ノ内遺跡				○		○	○
7	佐才御館間遺跡		○	○		○		18	館小路遺跡						○	○
8	原山遺跡		○	○				19	御厩前遺跡						○	○
9	大乘遺跡		○	○	○			20	立開城跡						○	
10	羽拔沢遺跡		○		○	○		21	紅葉城跡						○	
11	中坪遺跡		○			○	○									



第1図 馬場坪遺跡周辺遺跡分布図(国土地理院 2万5000分の1「下吉影」)

第3章 調査の成果

第1節 遺跡の概要

馬場坪遺跡は、小美玉市（旧東茨城郡小川町）の北東部、巴川西岸の標高15～16mの低位の台地上に立地している。調査前の現況は畑地であり、調査面積は764㎡である。

確認された遺構は、中世の堀跡1条、時期不明の溝跡1条と土坑2基である。

遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に1箱出土している。主な遺物は、縄文土器片、土師器片、土師質土器（小皿・内耳鍋）、石器（砥石）、鉄器（釘カ）、陶器片、獣骨（馬歯）などである。

第2節 基本層序

調査区南西部のB1d6区にテストピットを設定し、基本土層の堆積状況の観察を行った。テストピットの地表面の標高は15.8mで、地表から約1.6m掘り下げた。土層は6層に分層され、観察結果は以下のとおりである。

第1層は、黒褐色を呈する耕作土層で、ローム粒子を少量含んでいる。粘性は弱く、締まりは普通であり、層厚は26～36cmである。

第2層は、褐色を呈するローム層への漸移層で、ローム粒子を少量含んでいる。粘性・締まりともに普通で、層厚は24～30cmである。

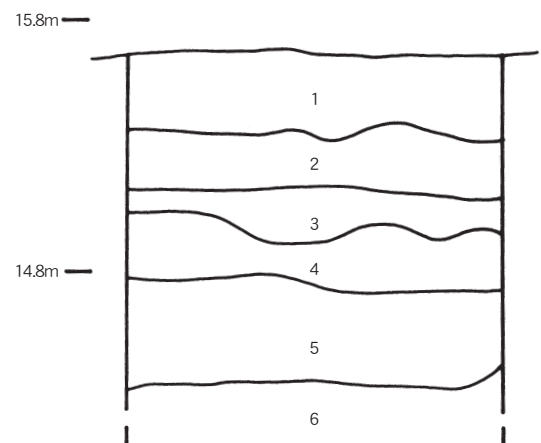
第3層は、暗褐色を呈するソフトローム層で、ロームブロックを微量、ローム粒子を多量に含んでいる。粘性・締まりともに普通であり、層厚は8～24cmである。

第4層は、明黄褐色を呈するハードローム層で、粘性は普通で締まりは強く、層厚は14～28cmである。

第5層は、にぶい黄褐色を呈する粘土層への漸移層で、粘土粒子を中量、ローム粒子を微量含んでいる。粘性は強く、締まりは普通で、層厚は36～42cmである。

第6層は、黄褐色を呈する粘土層で、常総粘土層と考えられる。粘性は強く、締まりは普通である。下層が未掘のため、本来の層厚は不明である。

なお、遺構の多くは第2層上面で確認され、第2～3層にかけて掘り込まれている。

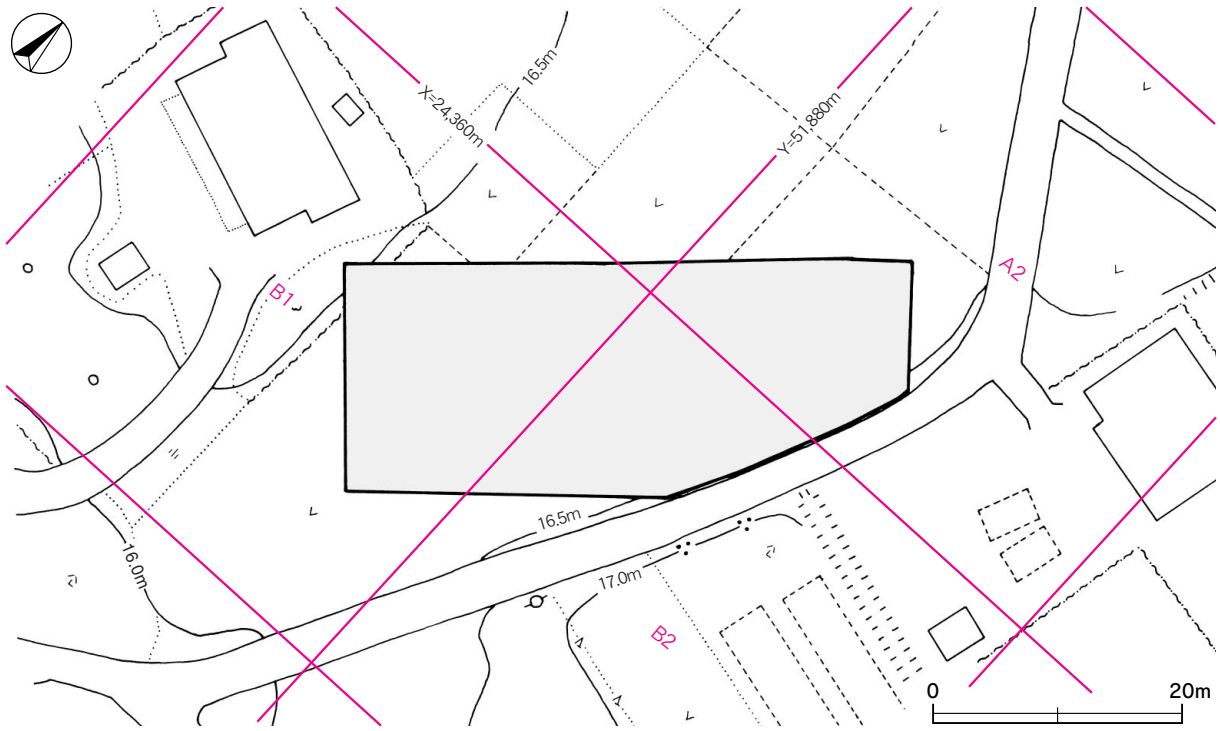


第2図 基本土層図

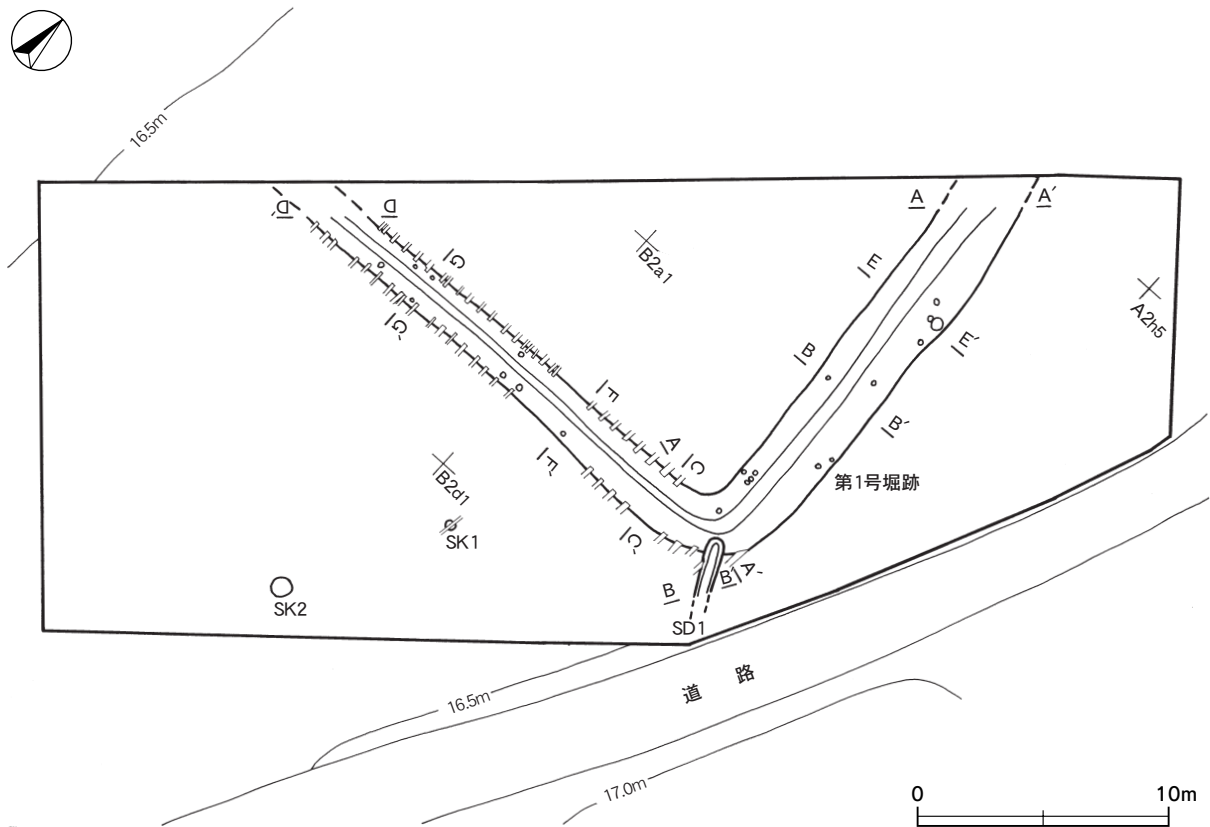
第3節 遺構と遺物

1 中世の遺構と遺物

調査区の中央部から、L字状の堀跡が1条確認されている。以下、確認された遺構と遺物について記述する。



第3図 馬場坪遺跡調査区設定図



第4図 馬場坪遺跡遺構全体図

第1号堀跡 (第4～6図)

位置 調査区中央部のA 2g3～B 1b8区で、標高15.7mほどの低位台地の平坦部に位置している。

重複関係 南コーナーの上部を、第1号溝に掘り込まれている。また、全体的に耕作による攪乱を受けている。

規模と形状 B 1b8区から東方向N-90°-Eへ直線的に22m伸び、B 2c2区でほぼ直角に屈曲して北方向N-4°-Wへ19mほど伸びている。規模は上幅1.5～3.2m、下幅0.4～1.0m、深さ0.6～1.0mである。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。断面形は一部が箱薬研状で、ほかは薬研状である。

ピット 21基確認されたが、本跡との関連は不明である。上端のみ全体図に掲載した。

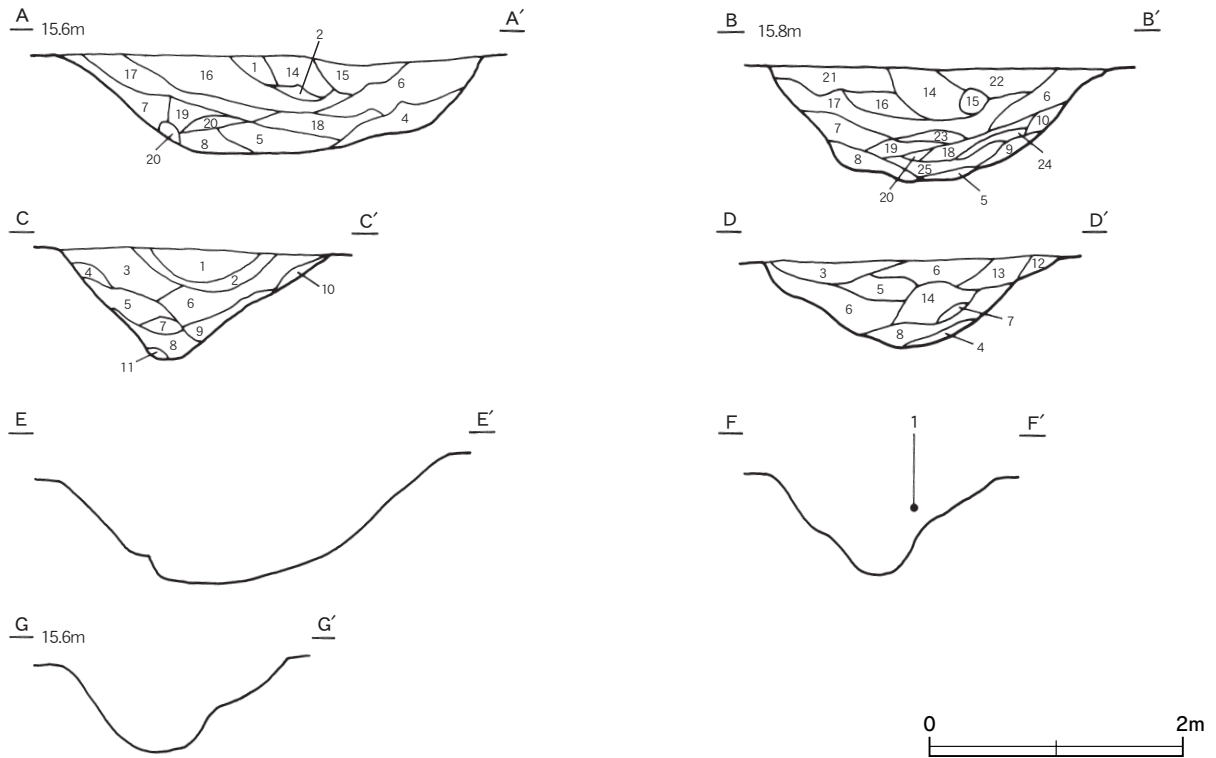
覆土 25層からなり、ブロック状に堆積した人為堆積である。

土層解説

1 黒褐色	ロームブロック中量, 炭化粒子微量	13 黒褐色	ロームブロック少量
2 黒褐色	ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量	14 褐色	ロームブロック少量
3 黒褐色	ロームブロック中量, 炭化粒子少量	15 褐色	ロームブロック中量
4 黒褐色	ローム粒子少量	16 暗褐色	ロームブロック微量
5 黒褐色	ロームブロック中量, 粘土ブロック微量	17 暗褐色	ロームブロック少量, 粘土粒子微量
6 黒褐色	ロームブロック中量, 粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	18 黒褐色	ローム粒子少量, 粘土粒子微量
7 暗褐色	ロームブロック中量, 粘土粒子少量	19 黒褐色	ローム粒子・粘土粒子微量
8 褐色	ロームブロック・粘土ブロック中量	20 黒褐色	ローム粒子微量
9 黒褐色	ロームブロック中量, 粘土ブロック微量	21 暗褐色	ロームブロック中量, 焼土粒子微量
10 暗褐色	ローム粒子少量	22 暗褐色	ロームブロック少量
11 黒褐色	粘土ブロック・ローム粒子微量	23 黒褐色	ロームブロック中量
12 褐色	ローム粒子中量	24 黒褐色	ローム粒子中量
		25 暗褐色	ロームブロック中量

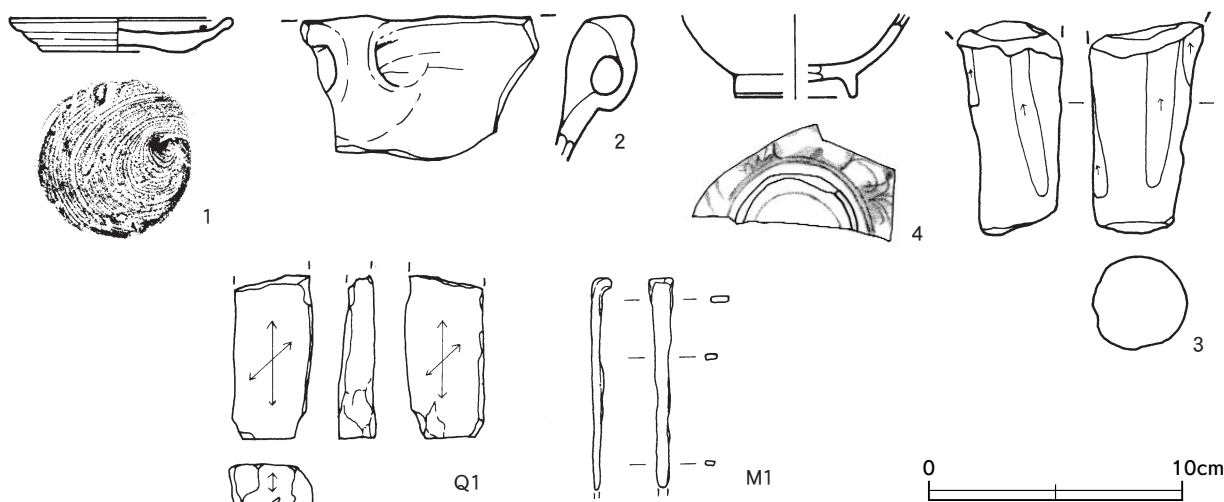
遺物出土状況 土師質土器片4点(小皿1・内耳鍋3), 肥前系陶器片1点(染付碗), 馬歯が出土している。

1と馬歯は南コーナー付近の覆土中層, 2・4は北部の覆土上層から出土している。



第5図 第1号堀跡実測図

所見 堀の北と西が未掘であることから全体的な形状は不明であり、出土した遺物の数も少ないことから、明確な時期決定は出来ない。しかし、陶器片が覆土上層から出土していることから、17～18世紀頃には埋没していたと推測される。さらに、土層断面の形状から掘り換えされた可能性が認められる。また、馬歯が出土していることから、雨乞いなどの祭祀的行為が行われていたことも推測できる。



第6図 第1号堀跡出土遺物実測図

第1号堀跡出土遺物観察表（第6図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法・文様の特徴	出土位置	備考
1	土師質土器	小皿	8.7	1.4	6.0	石英・長石・雲母・赤色粒子	橙	普通	ロクロ成形 底部回転糸切り 内面油煙付着	覆土中層	90% PL 2
2	土師質土器	内耳鍋	—	(5.8)	—	石英・長石・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	口縁部内面・上面横ナデ 外面煤付着	覆土上層	PL 2
3	土師質土器	三足鍋カ	—	(8.4)	—	石英・長石・雲母・繊維	橙	普通	外面へラ削り	覆土上層	
4	陶器	碗	—	(3.3)	[4.7]	精良 透明釉	灰白色	良好	外面草文染付	覆土上層	20% PL 2

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q1	石製品	砥石	(6.4)	3.1	1.6	(50.7)	砂岩	砥面3面 他は破断面	覆土上層	PL 2

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M1	鉄製品	釘カ	(8.4)	0.4~0.7	0.2	(9.8)	鉄	断面方形 脚部欠損 頭部折り返し	南西部下層	PL 2

2 その他の遺構と遺物

出土遺物などから時期及び性格を判断することができなかった遺構は、溝跡1条、土坑2基である。以下、遺構と遺物について記述する。

(1) 溝跡

調査区東部から溝跡1条が確認された。平面図については全体図に掲載する。

第1号溝跡（第4・7図）

位置 調査区東部のB2b3～B2c3区で、標高15.7mの低位台地の平坦部に位置している。

重複関係 第1号堀を掘り込んでいる。

規模と形状 東側は調査区域外に延びているため、全体を把握することは出来なかったが、長さ2.5mが確認

され、走行方向はN-24°-Wである。上幅0.5~0.7m、下幅0.3m、深さ0.4mで、底面は皿状であり、壁は外傾して立ち上がり、U字状の断面形を呈している。

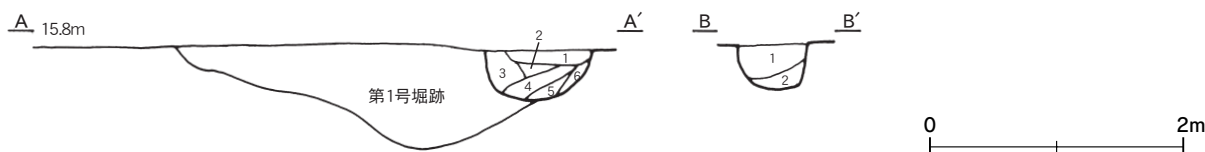
覆土 6層からなり、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------|-------|-------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック中量 | 4 暗褐色 | ロームブロック多量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック中量, 炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック少量 | 6 暗褐色 | ロームブロック中量, 炭化粒子少量 |

遺物出土状況 土師器片2点(坏類)が出土している。土器片はいずれも細片で、覆土上層から出土しており、流れ込みによるものと考えられる。

所見 第1号堀の上層を掘り込んでいることから、堀が埋没した後に掘り込まれたものと推測できる。しかし、時期を判定できる資料がなく、時期や性格は不明である。



第7図 第1号溝跡実測図

(2) 土坑

第1号土坑 (第8図)

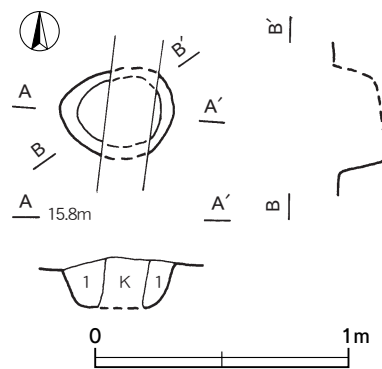
位置 調査区南部のB 2 d1区で、標高15.6mの低位台地の平坦部に位置している。

規模と形状 長径0.5m、短径0.4mの楕円形で、深さは17cmである。底面はほぼ平坦であり、壁は外傾して立ち上がっている。南北方向の耕作による攪乱で、底面の中心部は確認できなかった。長径方向はN-85°-Wである。

覆土 単一層である。耕作による攪乱の影響を受けているため明確ではないが、ロームブロックが不規則に混入していることから人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|-------|-------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 |
|-------|-------------------|



第8図 第1号土坑実測図

所見 小規模のため貯蔵施設や墓坑とは考えにくく、性格は不明である。

第2号土坑 (第9図)

位置 調査区西部のB 1 e0区で、標高15.6mの低位台地の平坦部に位置している。

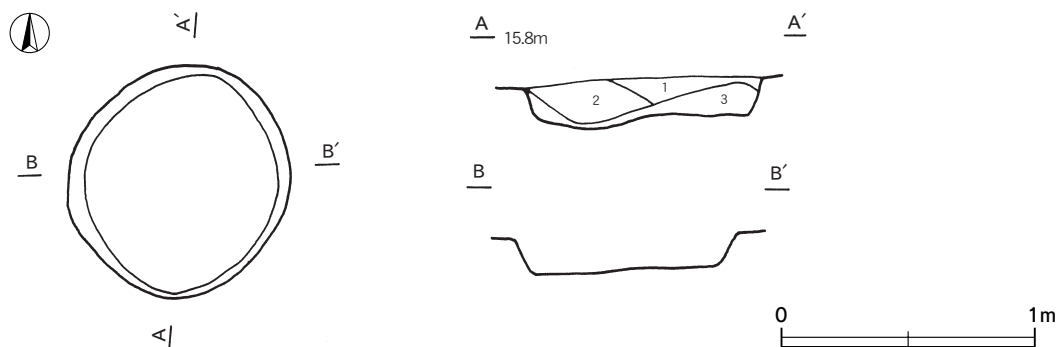
規模と形状 径0.9mの円形で、深さは15cmである。底面はほぼ平坦であり、壁は直立ぎみに立ち上がっている。

覆土 3層からなり、各層ともロームブロックを含んだ堆積状況を示しており、人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------|------|-----------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック中量 | 3 褐色 | ロームブロック多量 |
| 2 褐色 | ロームブロック少量 | | |

所見 円形を呈していることや覆土の堆積状況などから、墓坑とも考えられるが、掘り込みが浅いため不明である。時期も出土遺物がないために不明である。



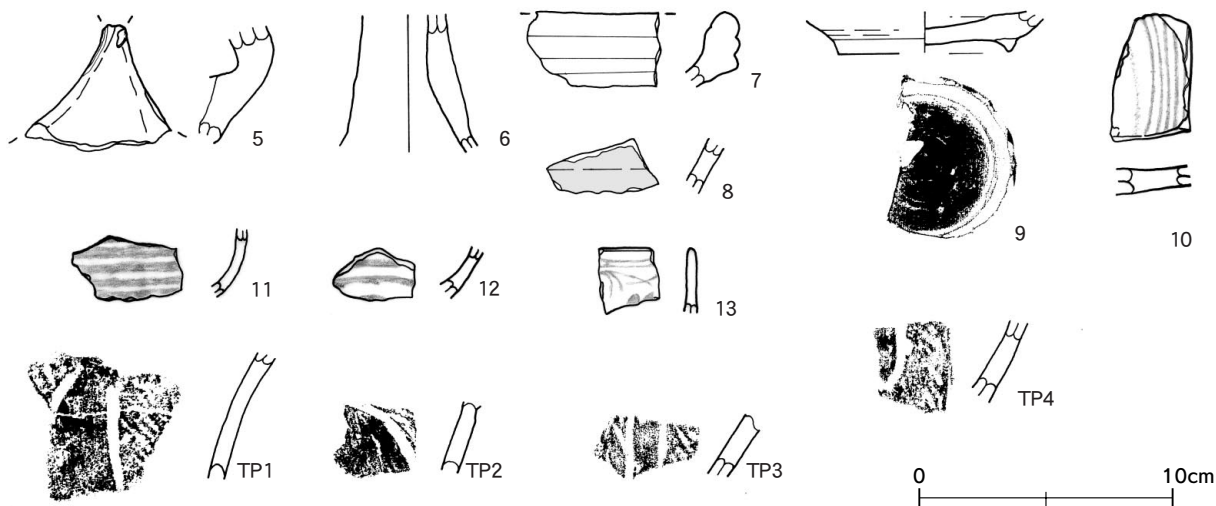
第9図 第2号土坑実測図

表2 土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考・重複関係
				長径(軸)×短径(軸)(m)	深さ(cm)					
1	B 2 d1	N-85°-W	楕円形	0.5×0.4	17	外傾	平坦	人為		
2	B 1 e0	N-0°	円形	0.9×0.9	15	直立	平坦	人為		

(3) 遺構外出土遺物

当遺跡から出土した遺構に伴わない遺物について、実測図及び出土遺物観察表で記載する。なお、14は細片のため観察表及び写真図版のみの掲載とした。



第10図 遺構外出土遺物実測図

遺構外出土遺物観察表 (第10図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法・文様の特徴	出土位置	備考
5	縄文土器	深鉢	-	(5.0)	-	石英・長石・雲母・繊維	橙	普通	波頂部の把手 側面に沈線を施文	北部下層	後期初頭 PL2
6	土師器	高坏	-	(5.4)	-	石英・長石・雲母	黄橙	普通	外面摩滅	表土	PL2
7	土師質土器	搦鉢	-	(3.0)	-	石英・長石・赤色粒子・礫	橙	普通	ロクロ成形 刷り目8条以上	表土	明石・堺系

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法・文様の特徴	出土位置	備考
8	陶器	播鉢	—	(2.2)	—	長石 鉄釉	褐	普通	ロクロ成形	表土	瀬戸美濃 PL2
9	陶器	皿カ	—	(1.7)	[7.0]	長石 透明釉	黄灰	普通	ロクロ成形 重ね焼き痕	表土	PL 2
10	陶器	大鉢	—	(1.1)	—	緻密 灰釉	灰白色	良好	櫛目	表土	唐津 PL 2
11	陶器	丸碗	—	(2.6)	—	緻密 灰釉	オリーブ	良好	ロクロ成形	表土	瀬戸美濃 PL2
12	陶器	碗	—	(2.1)	—	緻密 透明釉	灰白色	良好	ロクロ成形 刷毛目	表土	唐津 PL 2
13	陶器	碗	—	(2.6)	—	緻密 透明釉	灰色	良好	外面草文染付	表土	肥前カ PL2
14	陶器	徳利カ	—	(2.7)	—	緻密 透明釉	白色	良好	無文様	表土	肥前カ PL2
TP1	縄文土器	深鉢	—	(5.0)	—	石英・長石・赤色粒子	橙	普通	沈線文区画内, LR充填	北部下層	後期初頭 PL2
TP2	縄文土器	深鉢	—	(2.8)	—	石英・長石・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	沈線文区画内, LR充填	北部上層	後期初頭 PL2
TP3	縄文土器	深鉢	—	(2.5)	—	石英・長石・赤色粒子	橙	普通	沈線文区画内, LR充填	表土	後期初頭 PL2
TP4	縄文土器	深鉢	—	(3.3)	—	石英・長石・赤色粒子	橙	普通	沈線文区画内, LR充填	表土	後期初頭 PL2

第4節 ま と め

中世の堀跡1条のほかに時期不明の溝跡1条と土坑2基が検出された。ここでは、当遺跡からの出土遺物と堀跡について概要を述べ、まとめとしたい。

1 出土遺物

縄文土器、土師器、土師質土器、陶器のほか、石器（砥石）、鉄器（釘カ）や馬歯が出土した。出土点数はわずかで、大半が小片である。縄文土器は、文様の特徴から後期初頭のもので、周辺の内新田遺跡や中佐才遺跡からも同時期の土器が確認されている¹⁾。土師器は、高坏脚部の形状から古墳時代前期のものと考えられる。土師質土器小皿は、その計測値や口縁部の形状から平安時代末期から中世初頭の所産と考えられる。また内耳鍋は、口縁から体部の形状により16世紀前半の可能性が高い。陶器は、形状と文様から17～18世紀のものとは比定できる。

路線幅という限られた調査範囲のため、住居跡などの直接的な生活の痕跡は確認されなかったが、周辺では縄文時代から近世にかけての遺跡も確認されており、当地域は長く人々の生活の領域の一部であったことが想定できる。

2 堀跡

ほぼ東西と南北に軸を合わせたL字状に延びる堀跡が検出された。堀の底面に高低差が見られないことや、河川よりも高位の台地上にあることから、空堀であったものと思われる。また、土層の状況から何度か掘り換えが行われていたことが推測され、堀の維持管理には相当の労力を要したことがうかがわれる。出土遺物は、土師質の小皿が覆土中層から出土していることと、内耳鍋や陶器が覆土上層から出土していることなどから、中世前半には掘削され、後半まで機能していたものと思われる。さらに、馬歯の出土により、雨乞いなどの祭祀行為が行われていた²⁾ことを推測することも可能である。しかし、堀跡一部の検出のため、全体的な形状や性格については明確にすることはできなかった。

3 小結

本跡の北側には、周辺の人々の信仰を集めた貴船神社があり、神社に向かって堀跡が延びていることから

当神社との密接な関連が推測できる。一方、600mほど北西の支谷を挟んだ丘陵上には、当時の有力豪族である井坂氏の居城とされる立開城が位置している。井坂氏は貴船神社の氏子でもあり、本跡との関連は密接なものと推定できる。さらに周辺には、巴川を挟んだ南東に大掾氏系の紅葉城、南に小田氏系の小河城が位置して井坂氏と勢力を拮抗させていた状況がうかがえる。

ここで、堀跡の性格について推測すると、立開城の出城や立開城築城以前の在地領主の居館跡などが考えられ、いずれも明確な根拠に乏しいため断定することはできないが、今後の調査研究によってその性格が解明されていくことを期待したい。

註

- 1) 小川町教育委員会『茨城県東茨城郡小川町 埋蔵文化財分布調査報告書』小川町 1985年3月
- 2) 和田萃『日本古代の儀礼と祭祀・信仰 中』塙書房 1995年3月

参考文献

- ・ 櫻村宣行「和泉式土器編年考—茨城県を中心として」『研究ノート』5号 (財)茨城県教育財団 1996年6月
- ・ 川村満博「茨城県南部を中心に見た12世紀後半～15世紀のロクロ成形かわらけについて」『研究ノート』12号 (財)茨城県教育財団 2003年6月
- ・ 白田正子「茨城県における中世末から近世にかけての土師質内耳土器について」『研究ノート』7号 (財)茨城県教育財団 1998年6月
- ・ 文部科学省特定領域研究・特定領域計画研究「中世窯業の諸相」『生産技術の展開と編年 資料集』 2005年9月
- ・ 霞ヶ浦町郷土資料館「やきものの旅」『近世霞ヶ浦の水運と流通』 2002年1月
- ・ 稲田義弘「新善光寺跡 宍戸城跡 主要地方道大洗友部線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第256集 2006年3月

写 真 图 版



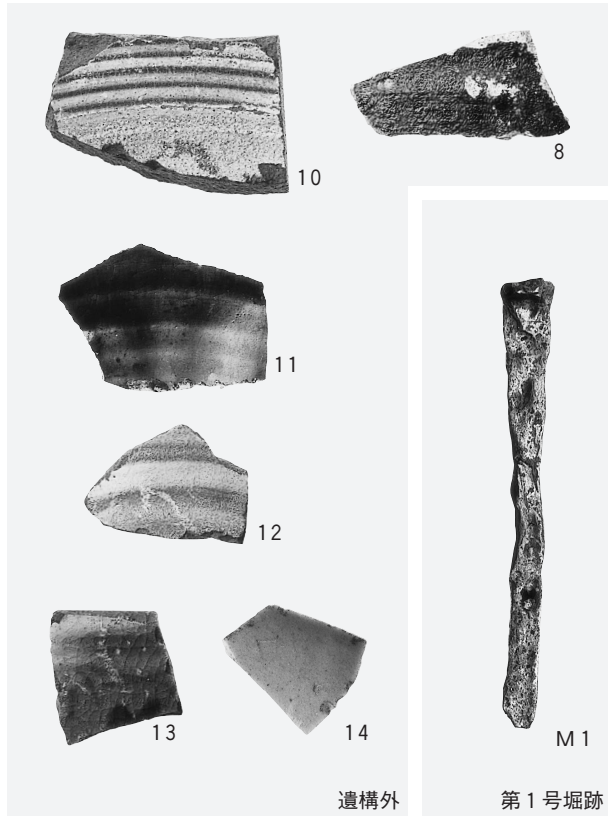
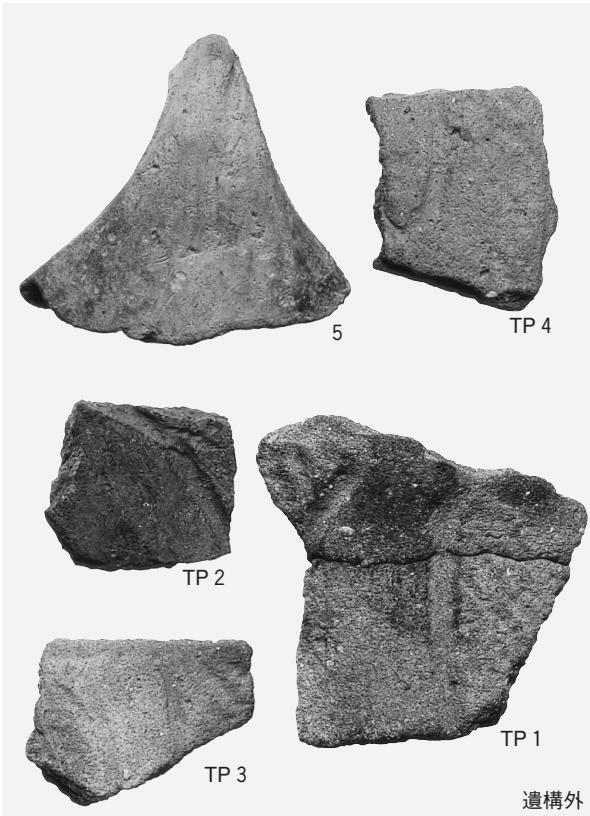
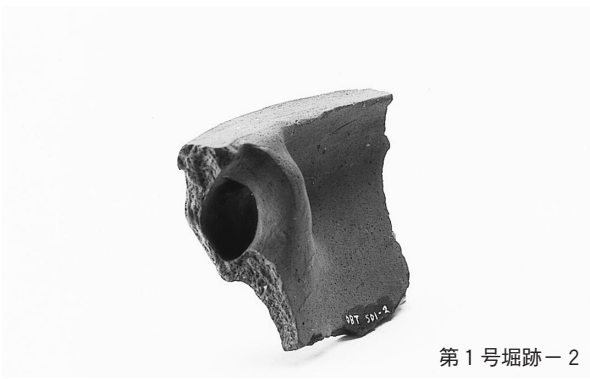
遺跡全景
(北から)



第1号堀跡(西部)
完掘状況



第1号堀跡(北部)
遺物出土状況



第1号掘跡・遺構外出土遺物

茨城県教育財団文化財調査報告第273集

馬 場 坪 遺 跡

一般県道紅葉石岡線道路改良事業地内
埋蔵文化財調査報告書 2

平成19(2007)年 3月19日 印刷

平成19(2007)年 3月23日 発行

発行 財団法人 茨城県教育財団

〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2

茨城県水戸生涯学習センター分館内

TEL 029-225-6587

印刷 株式会社 光和印刷

〒310-0836 水戸市元吉田町1823-22

TEL 029-247-4362